

令和6年度

信州ESDコンソーシアム成果発表&交流会

I'M POSSIBLEのみなさんへの質問・感想

- ・ 明確な思いや願いを持って行われている活動だということが発表からも伝わってきました。中学生が「またやりたい」「他のパラスポーツもしてみたい」という回答があったというお話は、生徒にとって他者理解、共生社会について考える良いきっかけであったということがうかがえました。車いすバスケの存在は知っていましたが、自分も経験してみたいと思いました。
- ・ 障害者スポーツを広げるために、いろんな人と繋がりながら活動されていることを知りました。また最後にはほしいなと思う支援を聞きました。知ってほしい、広めたいという思いをずっと大切に、長く続けていくことで仲間が増えていく感じも学ばせてもらいました。学部も同じなので、ぜひ参加したいし、頑張ってもらいたいと思います。
- ・ 「パラスポーツを知ってもらいたい」という願いのもと、こうして活動を発信されている姿に大きな感銘を受けました。自分たちの思いを伝えるだけでなく、パラスポーツを体験してもらうことでたくさんの人の声が集まっていくことで、より広めていく仲間が増えていく活動につながっているように思いました。体験や発信の回数が壁になったとお話がありましたが、一回一回に込められているメンバーのみなさんの思いは、必ず届いているように思いました。発表を通して、まずパラスポーツを知ってもらうことがパラスポーツやそこにいる人々の思いを理解することにもつながるように思いました。素敵な活動、応援しています。
- ・ 附属長野中の車椅子バスケットの実践を見学した際、車椅子を使用することで運動能力の条件を揃え、対等に競技を行うスポーツ特有のルールがあるのではないかと感じた。つまり、スポーツにおいては、多様な個性を生かすことよりも、運動能力を均一化することが求められ、多様な身体特性やグラデーションに沿わせてどのように対応していくのか疑問に感じていた。
しかし、今回の発表で「身体障害の重さによって点数が決められている」というルールがあると知り、単に道具だけでなくルールの面から差異が設けられているという点がとても興味深かった。また、障害が軽い選手ほど点数が高く設定をされているということに疑問をもった。私は、障害が重い選手の方がハンディキャップが大きいと、得点が高くなるのではないかと考えたからだ。調べてみると、チーム全体の合計得点に上限があるというルールがあるが、障害の軽い選手を多く入れる戦略がとられたり、点数の高めの選手を多く入れるようなチーム編成に繋がらないのか、その結果として障害の重い選手が試合に出にくくなるのではないかと気がになった。
しかし、このルールの意図についてよく考えた時、それは、障害のある選手を優遇するためではなく、競技としての「対等な戦い」を成立させるためなのではないかと思った。障害の重さに関わらず、人と人が競い合うことを前提にしている点において、このルールは「真の対等性」を追求しているのではないかと感じた。私は、パラスポーツの本質は「補助」にあると無意識に考えていたのかもしれない。今回の発表からあくまで前提にあるものは「対等に戦うため」であり、「対等に戦うため」の補助があるのではないかと考えさせられた。つまり、車椅子バスケを「障害を補うためのもの」としてのみ捉えると、それが高度な戦略性や競技性を持つスポーツであるという点を見落とし、選手を対等な競技者としてではなく、支援される存在として扱ってしまうことがあるのではないか。その意味で、「補助」を目的とすることが、かえって対等な関係を損なうことになり得る。「補助＝平等」ではなく、「対等な競争を可能にする仕組み」として補助を捉える視点が重要であり、意図せず相手の能力や可能性を制限する考え方を問い直していかなければならないと考えさせられた。
また、車椅子バスケという競技を見た時に、私は「車椅子」は「バスケ」のためのプラスアルファの要素として、何か特殊なものという感想を抱いていた。しかし、実際には車椅子バスケとは、ある種それ自体、新たなスポーツなのではないかと感じた。例えば、野球だったら手で打つのではなく、バットという道具を用いることで競技が成り立つように、スポーツにおいては、道具は単なる補助ではなく、新たなプレイやルールを生み出し、創造する要素になりうるのではないか。加えて、バスケはトラベリングのルールがあるが、車椅子バスケではそれが無い。小学校でのバスケでは、初心者が慣れないボールの大きさやルールからトラベリングで競技が止まってしまう場面を多く見る気がする。この点において、車椅子バスケは、身体障害を補助するためのものでもあるが、バスケ初心者の児童（健常者、ある意味では障害のある者）に対しても、示唆を与えるルールや概念があると感じた。車椅子バスケから小学生のバスケのルールを見た時に、トラベリングというルールに関して問い直すことができるのではないかと感じた。バスケの授業を考えた時に、一般的なルールに眼前に存在する多様な子どもたちを適応させるだけでなく、多様な子どもたちの特性に合わせて、ルールを創造することは、車椅子バスケが追求する「多様性を前提としたルールの創造」と通じるものがあるのではないかと考えさせられた。

〔I'M POSSIBLEのみなさんからの回答〕

ご感想ありがとうございます。

近年、パラスポーツは障がいの有無関係なく取り組むことが出来る「ニュースポーツ」

として捉えられ、また、パラスポーツ普及をしていく側もその思想で活動を行っております。

その点、車椅子バスケットボールは車椅子に乗ってしまえば、基本的に障がいの有無及び運動能力に関係なく

皆が1から楽しむことができるスポーツとして考えられています。たとえバスケットボール経験者でも、

車椅子操作が思うようにできないとバスケットで培った技術は発揮できません。

このスポーツの面白いところは、①車椅子操作と②バスケットボール技術及びボールの扱いの2動作を常に行う

必要があるところになります。また、点数制を用いて、色々な障がいの人、つまり、色々な得意技術を持っている人が同じ

チームで同じコートに立って共闘していくところにあります。互いの苦手なものや得意なものを

補い合って初めて成り立つ、強いチームが完成します。チームワークの真髄を示しているものだと考えられます。

車椅子バスケットボールには「ダブルドリブル」はありませんが、トラベリングは存在します。これは車椅子バスケットボール特有のルールで「ボールを持って3回漕いではいけない」というものです。ですが、学校現場で子どもにバスケットボールを教えていく際には、子ども達の能力、特性に合わせてルールを簡略化して徐々に本来のルールに近づけて楽しんでもらえる工夫をしていくと良いのではないかと思います。その1参考として車椅子バスケットボールが使えるのであれば、是非活かしていただけたらと思います。

ありがとうございました。

- ・ チームほっこりさんに続き、I'MPOSSIBLEさんの活動もととても探究的に学んでいる姿だった。本校の総合的な学習の時間にも関わっていただいたが、体験することで、車いすバスケや車いすに乗るということ、さらには、自分が経験したことのないことを経験している他者を理解していく際の思考が変化するという。教育学部の皆さんなので、ぜひ教員となって、生徒の探究的な学びを支えてほしいと感じた。今の教育の問題点は、「探究的な学び」が必要とされているにもかかわらず、教師が「探究的な学び」をした経験がなく、どのように伴走してよいか分からないことだ。現在進行形で探究的な学びをしている皆さんから、教員や生徒が学ぶことは多いと思う。ぜひ教員になってください！
 - ・ 車いすバスケットボールは興味があるけれど、機会がなかったり、用具の問題を考慮してしまったりするな…というのが私の率直な感想です。体験会を実施してもらえると、「行ってみようかな」、「やってみようかな」という気持ちにもなりそうです。さらに、学園祭やオープンキャンパスなど、多くの人が集まる場所で、車いすを使ったイベント（車いすかけっこや、車いす障害物競走など）を行うと、参加者は、「行ってみようかな」という気持ちになりますし、実施者は、参加者に車いすで移動する難しさ、日常にある障壁などを感じてもらえると言った利点があるのではないのでしょうか。
- また、小学校や中学校の段階でこのようなスポーツに触れることもいいなと思いました。一教員として、障がい者理解に関わる授業をしたいと思っていても、用具がなかったり知識がなかったりと、実施が難しい状況です。是非、みなさんにご協力をいただきたいと思いました。チラシなどを各学校に配付していただければ多くの先生方が申し込むかなと思います。

- ・ 〔I'M POSSIBLEのみなさんからの回答〕

ご感想ありがとうございます。

今回少なからず活動をやってみて、その活動もどこも反応が想像より良かったため、

学校現場にもっと介入していってみたいと感じました。

教員からのそのような意見をいただけると自信になります。

私たちの活動が全てではないので調べてみると、パラスポーツ体験会や車椅子バスケットボール体験会を

実施している団体などは長野に多数ございます。例えば、障害者スポーツセンターであったり、信州大学車椅子バスケットボール部などがございます。

またそのようなところも参考にさせていただけたらと思います。

ありがとうございました。

- ・ パラスポーツを知って興味をもってもらうために実際に車いすに乗ってもらい、そのときにわかる感覚や楽しさ、難しさを体験してもらうことで、車いすを扱ったスポーツを知ってもらうだけでなく他者理解にもつながっていてよかったと思いました。また3つの壁という課題を明確化ができていたのでよかったと思いました。
- ・ パラスポーツもっと多くの人に知ってもらいたいという考えはすごくいいと思いました。私はパラリンピックについてはあまり知らないのですが、実際にやってみたいことばかりでした。車椅子に実際に乗ることを経験することや中学生を対象にした車椅子バスケットボールの体験を通して色々な人に魅力を伝える活動をされていて素晴らしいと思いました。
- ・ 車いすバスケットボールを通してパラリンピックスポーツの魅力や面白さを伝え、もっと多くの人に車いすバスケットボールのようなパラスポーツを多くの人に知ってもらおうという取り組みをしている点が素晴らしいと思った。
- ・ まとめられていて、見やすいスライドだった。将来教師になった時に車いすの大変さを知っていることで、車いすユーザーの児童、生徒がいたときに寄り添いやすくなると思うので、教育学部での車いすの体験は大切なことだと思う。地域の中学校などでも活動をしていて、大学生の行動の影響力は無限大だと思った。

- ・ パラスポーツを通じて、インクルーシブへの理解を進める取り組みを行っており、すごいと思いました。インクルーシブへの理解は当事者でないと難しいという部分もあると思います。一方で、中学生や大学生などを対象にパラスポーツへの体験会などを行うことで、それに対する理解は深まると感じました。そこから、インクルーシブを考えてみようというきっかけにつながるため、とても良い取り組みだと感じます。
 - ・ パラスポーツの認知度を上げる活動として、健常者が楽しく行える活動を企画していた点が良いと思った。感想などのデータを適切に収集することは、その他にどのようなアプローチができるのか考察するのに役立ち、次のさらに洗練された活動に繋がるため良いと思った。
 - ・ 活動に至るまでの経緯が分かりやすく、全体的に興味湧くような発表だと思いました。活動を進めた上での壁だと感じた部分についても、自分のこれからの活動に生かせるように感じました。
 - ・ 周りの支援によって行われる。多くの人数によって車いすの搬入やお金がかかってしまうので、多くの支援を受けてほしいと思った。また、若い世代に魅力を伝えたいという言葉から、どの世代においてもこの競技ができることが分かって面白そうだったと思った。
 - ・ パラスポーツという専門分野を通じて、様々な活動に取り組んでいて、素晴らしい組織だと感じました。特に、中学生の車椅子バスケットボールをすることで、小さい時期から障害理解や他者理解ができるようになり良いプロジェクトだと感じました。私自身まだ車椅子に乗ったことがないので来年度のどこかでI'm Possibleの活動に参加させていただきたいと思いました。
 - ・ 校内で車椅子を使用したり、車椅子バスケットを実際に体験するというイベントを通して、多くの人が障がい者の方やパラスポーツについての理解を深めることに繋がり、とても良い取り組みだと思いました。
- 全ての人が応援しあえるような社会になるために、自分にできることは何かを考えるきっかけになりました。
- ・ まず名前に感銘を受けた。ちゃんをつけると逆の意味になる名前を思いつけなかったことが一生の不覚である。車椅子バスケットを実際に中学生にしてもらい、障害者スポーツの楽しさを広げていて、アクティブだと思った。ぜひ私も車椅子バスケットをしてみたい。
 - ・ 実際に車いすを体験させることによって、パラスポーツに少しでも興味を持たせることが必要であると感じた。スポーツ、学校、人々が連携をしてパラスポーツについて知ることが大事であると感じた。
 - ・ まだまだ障がいに対する世間の知識や関心が薄いと自分も感じる中で、そのような活動で障がいに対する理解を広めているのが素晴らしいと思いました。自分もぜひパラスポーツなどをやってみたいと感じることができました。
 - ・ パラスポーツはもともと障害者のために作られたものですが、近年では障害者健常者関係なくプレーを楽しむ場も増えてきています。車いすバスケットボールはみんなが楽しめる競技で、そのことを知ってもらうべく、たくさんの活動を行っていることを知って私も車いすバスケットボール挑戦してみようと思いました。
 - ・ パラスポーツを広めていくことはとても大切であると思いました。私は小学校の時に車いすバスケットボールを行ったことがあります。その経験は今でも記憶に残っています。そのため今後もこのような活動を増やして欲しいです。
 - ・ 私も信州大学の教育学部生として、先輩方がこのような活動をされていると初めて知り、興味が湧くと同時に驚きました。オリンピックパラリンピックでは、どうしてもパラリンピックの注目が少なくなってしまうような気がしますが、先輩方がやられている活動が、パラスポーツへの興味関心に繋がるのかなと思いました。
 - ・ SNSやイベントの開催時期、日程調整など様々なトラブルがあったのにも関わらず、諦めずに活動されている姿に感動しました。国スポ・全障スポは私も注目しているので、ぜひみんなで盛り上げていきたいと思いました。
 - ・ パラスポーツには興味がありましたが、あまり見たことがなく、知識はほとんどなかったので、知ることができてよかったです。身体が健康であるとなかなか車いすに乗る経験などもないと思うので、自分の体で経験する機会が多くあればうれしいと思いました。
 - ・ 障害理解を深めようと、車椅子体験会などの活動を行ったということで、障害理解というのは口だけで伝えられてもわかりにくいという点があると思うので、実際に体験できるような活動を行うことはとてもいいことだと感じた。
 - ・ パラスポーツの一種である車いすバスケットの普及を目指すことを通して、車いすの人の困難についても広められる点がとても良いと思った。また、内容自体もよかったがスライドがすごく見やすく、きれいで工夫されていてマネしたいなと思った。
 - ・ 今まで環境に対する活動が多かったが、SDGsの中には他の目標もあるということを再認識することができた。また、体験活動を通していろんな人に活動について知ってもらったり、自分たちの活動だけで走ることのできなかった課題点を知ることができていて、次の活動にもつながるような活動ができていて素晴らしいと思う。
 - ・ I'MPOSSIBLEさんの活動目標は、「パラスポーツをもっと多くの人に知ってもらいたい」でした。この活動では、車いすに実際に乗ってみたい、もっと深くいくと、車いすバスケットを体験したりするといった、体験学習をもとに活動しているのが印象的でした。
 - ・ 私はパラスポーツを体験したことはありませんが、障がい者理解や他者理解のために体験しておくことはとても重要だと思いました。私は教員を目指している立場なので、特に障がい者理解は重要だと感じますが、そのほかの人にとっても必要なことであると感じました。

- ・ パラスポーツに関して現状あまり詳しく知られておらず、メジャーではないため、いまだ理解が不足しているように思える。その中で、普及していくためにも実際に体験する機会などを設け、その競技に触れる機会を実施するのはとてもパラスポーツの普及に有効であると感じる。やはり多岐にわたる理解をより多くの人にしてもらうことは大切だと考え、私自身もパラスポーツに触れてみたいと感じた。
- ・ 大学に入学したときに、車椅子バスケットボールのサークルがあると知って驚きました。私もアイスホッケー部に入っていて、よくパラアイスホッケーの人たちの練習を拝見させていただくときがありますが激しく華麗にプレーをしていて感動します。パラスポーツの魅力をより広めていけるよう私も頑張りたいと思えました。ありがとうございました。